

書物史の観点から考察するジョン・イーヴリンの *Numismata*

高野美千代

John Evelyn's *Numismata*: Its Publication and Reception

TAKANO Michiyo

Abstract

The purpose of this study is to clarify the circumstances surrounding the publication of John Evelyn's *Numismata* (1697), a book on numismatics (the study of coins and medals), and to analyze the characteristics of *Numismata* from the perspective of the history of books. Furthermore, this study also examines the reception and evaluation of this work from the eighteenth century to the twentieth century. Evelyn's objectives were twofold: to advance research in numismatics in England to put it on a par with research performed in continental European countries, and to promote the study of English medals. An analysis of the characteristics of *Numismata* from the perspective of history of books indicates that its text and illustrations had a synergistic effect, making a significant impression on its readers, among whom were numismatists and artists. In addition, the list of books presented in *Numismata* by Evelyn makes it possible to speculate about the specific readership and the extent to which numismatics was popular in England at the time. For many years, the general view of this work has been negative, but at the same time, there are certainly parts of it that are valid and useful for numismatics research, an example of this being the first reference to the Petition Crown created by the engraver Thomas Simon in 1663.

キーワード：ジョン・イーヴリン、古銭学

key words: John Evelyn, *Numismata*, numismatics

はじめに

ニューミズマティクス (numismatics) を日本語で言うと、古銭学あるいは貨幣学となる。日本国内では、元禄時代に『和漢古今宝銭図鑑』(著者不詳、1694) という絵入の古銭書が出版された。ちょうど同時期に、英国においても挿絵がふんだんに取り入れられた一種の古銭書が出版されている。「古銭」とは言っても、貨幣に限ったものではない。少なくともヨーロッパのニューミズマティクスにおいて扱うものは、コインとメダルの双方である。コインは流通する貨幣すなわち通貨・金銭で、メダルのほうは記念や褒賞など特別な意味を込めて発行されるものである。たとえば

ローマでは紀元前から名誉や功績を称えるためメダルが作られており、中世にはヨーロッパの広範囲でメダルが作られ授与されるようになり、ルネサンス期においてはメダルの製造がさらに盛んとなった。

ニューミズマティクス研究が17世紀のヨーロッパ大陸諸国で発展していたのとは比べると、英国での研究は遅れを取っていた。若き日、フランスやイタリアで暮らしたジョン・イーヴリン (John Evelyn, 1620-1706) は、実際にそのことを体験的に知ることになり、英国での状況を改善するためにニューミズマティクスを扱う著書の出版を模索し、完成した本が *Numismata, Discourse of*

Medals, Ancient and Modern(1697)である。ニューミズマティクスの研究書であるが、著者は主にメダルを扱っている。また、彼の古銭研究における関心は、貨幣の流通や経済活動ではなく、メダルの背景にある社会、文化、政治、あるいは美術、芸術に置かれている。本の冒頭部分でイーヴリンは、世界のあらゆるものが時の経過によって朽ちていき、失われていく中で、メダルは数百年という長きにわたって過去の栄光・知識を伝えていることを認識し、メダルこそが、「もっとも永続的、声楽的モニュメントである」とみなしている。¹⁾イーヴリンの頭の中には、たとえばフランスのパリにはメダルや銘刻を研究する紳士のアカデミーがあるのだから、母国イギリスにおいてもニューミズマティクス研究の水準を上げたいとの思いがあり、英語での著書執筆に着手した。本稿では17世紀後半の英国において幅広い学識を発揮して活躍したイーヴリンが、ニューミズマティクスすなわち古銭学研究の書物を執筆し出版した経緯を明らかにし、書物史の観点から*Numismata*の特徴を分析していく。さらに、この作品の受容と評価について検討してみたい。²⁾

1 イーヴリンと*Numismata*

イーヴリンは、現在ではおそらくダイアリストすなわち日記作者として最もよく知られている。彼が1640年から60年以上もの長きにわたって認めた日記は、友人でもあったサミュエル・ピープス(Samuel Pepys, 1633-1703)の日記と同じく、17世紀英国の世相を今に伝える貴重な記録とみなすことができる。ピープスが日記をつけていたのは1660年代に限定されるが、イーヴリンの日記はそれに比べてはるかに長い年月にわたっており、イギリス革命期からコモンウェルス期、王政復古から名誉革命に至る、まさに激動の時代をカバーしている。しかも彼の交友関係は宮廷や政界、学术界など幅広いものであった。ただし、日記が公刊されたのは19世紀のことだったので、イーヴリンの同時代人にとって彼の名声はダイアリストとしてではなかった。ニューミズマティクスを含め、大変幅広い分野に関して豊かな学識を持って

いたイーヴリンは、生涯で30点ほどの著作を発表しているが、とくに園芸・植物の分野に多大なる貢献をし、当時から現代に至るまで名前を残している。

ここで彼の伝記的背景に触れておくと、イーヴリンはロンドンの南、サリーの裕福な家庭に生まれた。そもそもイーヴリン家はエリザベス朝において火薬製造で富を築いた一族であった。ジョン・イーヴリンはオックスフォード大学ベリオルカレッジとミドルテンブル法曹院で学んだあと、1640年代の革命混乱期にはイングランドを離れ、しばらくの間フランスやイタリアに滞在して過ごした。そのおかげで大陸において豊かな文化交流の機会を得、1647年にはパリに亡命していたロイヤリスト一族の娘と結婚している。その後、イングランドに戻ったイーヴリンであるが、共和政時代の1650年代にはテムズ川南岸Deptfordの邸宅に閑居し、そこで庭園を築くなどしていた。そして、1660年の王政復古後のイングランドにおいて、イーヴリンは第一線での活躍を始め、王立協会(Royal Society)創設時のメンバーとなった。彼はとくに庭園や森林の管理、環境問題に詳しく、1661年にはロンドンの大気汚染について当時の状況を批判する意見を述べ改善策の提言を行うパンフレット"Fumifugium"を出版している。また、国内での植樹を促進し、海軍の需要に応えようと提言したことでもよく知られている。この提言は1662年に王立協会に提出され、のちの1664年に*Sylva*というタイトルで出版された。このフォリオはイーヴリンの代表作とされ、彼の存命中だけでも3度、版を重ねている。ヨーロッパ大陸諸国で数年を過ごし、その間あらゆる芸術作品に触れる機会を得た彼は、美術(銅版画)についての著作*Sculptura*(1662)において、メゾチントと呼ばれる新たな技法を紹介している。このように多彩な分野の研究をひとりの人物が成し遂げたというのは驚くべきことであり、それゆえにイーヴリンはヴァーチュオソ(virtuoso)と呼ばれるにふさわしいのだと言える。また、日記や書簡に記録されているように、彼の交友関係は幅広く、王族、貴族、科学者、聖職者など、17世

紀の英国で歴史上に名を残した人々、国の中枢にいた人々との交流があった。このことは、彼の著作の読者層、少なくともその一部を示唆するものであり、彼の出版物の影響力の大きさを推測させるものである。

さて、*Numismata*の出版に目を向けてみるとするが、これを扱ったのはロンドンの書籍商ベンジャミン・トゥック (Benjamin Tooke, c.1642-1716)である。トゥックは17世紀後半ロンドンの主要書籍商のひとりであった。イーヴリンとは長く付き合いがあったようで、イーヴリンの*Navigation and Commerce, their Original and Progress* (1674) や、最晩年の著作*Acetaria* (1699) もトゥックが出版を扱っている。*Acetaria*の2年前に出版された*Numismata*は小さめのフォリオ判で、本文は全9章342ページで構成されている。イーヴリンによる章立てを概観すると、第I章は「メダルの用途、すなわち貨幣としてか、または価値ある行動の記憶を保存するためか。そしてその起源、素材、サイズ、モデルなど」と題しており、第II章は、「複数の国家、文明国と未開国に関するメダル、および刻まれた肖像等」について扱う。第III章では、「古代および近代のメダルの裏面」を、歴史、年代学等の関連で取り上げる。つぎの第IV章では「メダルにふさわしい記念と名誉に値するその他の人物および事物」を扱い、第V章では「銘刻」、第VI章では「メダルの真贋を見分ける方法、および、希少なメダルを収集し入手する方法」を述べる。つづく第VII章では、「貨幣製造所、および最も熟練した芸術家、作家、収集家、コレクション」に注目する。第VIII章では、「銅版の肖像画」について、メダルとの関連で扱い、第IX章は「人相学」に関する余談とする。綿密な計画の下で構成された著作とは言えないかもしれないが、この書物の特筆すべき点は、大小約100点のメダルを紹介する版画が挿入されていることである。そのことによって、ニューミズマティクス研究者あるいはメダル収集家にとっては極めて有益な情報を提供する書物となったのである。本の中のメダルの図像は、コインもそうであるが、表面と裏面の両方が並べて置かれるが、縦列と並列

の両方の例が見られる。

*Numismata*冒頭部分に置かれたイーヴリンから読者へのメッセージには、彼の執筆の意図が記されている。彼は英語で書かれたニューミズマティクス研究書が不足していることを認識していたため、5年前すなわち1690年頃には、ラテン語・イタリア語・フランス語による関連資料の注釈を英語でまとめようとしていた。ところが、オバディア・ウォーカー (Obadiah Walker, 1616-1699) が同種の本をまもなく出版する運びとなっていたことを知り、その時点では自身の計画をいったん断念した。この本というのは、おそらくウォーカーによる書物、*The Greek And Roman History Illustrated By Coins And Medals* (1692) を指しているだろう。その後、イーヴリンは、これを含めて過去に世に出された多くの関連書物を参考とし、たとえ重複や繰り返しとなったりしても、重要とみなされる事柄には省略せずに言及し、手つかずとなっている荒地を開拓するように自身の書物を執筆しようと意図した。たとえばウォーカーが扱った時代以降のメダルに言及し、かつ英国のメダルを研究対象とすることによって、イーヴリンはウォーカーの著書を補完することになった。

英国のコイン、メダル研究について言えば、イーヴリン自身、*Numismata*において17世紀英国ではウィリアム・カムデンやジョン・スピード、ロバート・プロットがそれぞれの著書においてニューミズマティクス研究の成果の一端を発表していると述べている。(p.21) カムデン、スピード、プロットは、得意分野が異なるとしても、いずれもアンティークエリーとして著名な人物である。カムデンの*Britannia*は1586年の初版からとくに1695年版に至るまで長期間にわたって読み継がれた地誌であるが、言語はラテン語から英語へ変わることで自国の読者が増え、テキストのみから挿画入りになり、判も大型へと変わっていった。たとえば1610年の英語版では、ローマやサクソンのコインを89ページから96ページまでにわたって各ページ6点を掲載できるように配置し、説明を付している。スピードは、1611年に出版した英国史*The History of Great Britaine*に

において、アングロサクソン期のコインの木版画を数多く使用している。時代的には、カムデンとスピードは16世紀までのコインや印章を主に扱っている。イーヴリンの同時代人であったプロットは、博物誌*Natural History of Oxfordshire* (1677)の第10章において3点のコインについて言及している。その時代までに論じてこられなかったものとして、版画を彫らせて挿画に取り入れた。それは紀元1世紀頃のブリトンのコインと思われるもので、カムデンが類似したコインを紹介しているがそれとは異なっている。このように、イーヴリン以前に、英国の地誌、歴史書、博物誌の中で、ニュミズマティクスへの言及がなされてきた。うおカムデンとプロットの場合は特に、使われた版画は比較的粗野なものであって、*Numismata*ほどに精密な図版ではない。³⁾

さて、イーヴリンの*Numismata*では第3章において古代から同時代までの英国のメダルを紹介している。それらは主に親交のあったクラレンドン伯爵のコレクションのものと考えられる。⁴⁾約30点が紹介される中でも、ここで注目したいのは、彫刻師トマス・サイモン (Thomas Simon, 1618?-1665) が制作したメダルについての記述である。サイモンは若い頃から英国の主要メダル制作者・彫刻家として第一線にいた人物で、1645年には議会により (別の人物との共同) 主任彫刻家に任命され、共和政時代の国璽と貨幣用のダイスを制作した。その後、王立造幣局および国璽の主任彫刻師に昇進している。彼はオリバー・クロムウェルからその技術を高く評価され、クロムウェルの肖像を描いたり、肖像を含むメダルを複数制作するなどした。1650年のダンバーの勝利を記念するメダルはクロムウェル自身も気に入っていたと言われる。イーヴリンはサイモンによるオリバー・クロムウェルのメダルを*Numismata*の中で挿画を添えて紹介しているが、ロイヤリストのイーヴリンがクロムウェルについて語る時の口調は当然ながら厳しい。彼のことは「王位篡奪者 (Usurper)」あるいは「大篡奪者 (Arch Usurper)」と、その息子のことは「悪人 (Scourge)」と呼んでいる。メダルに描かれ

たクロムウェルは、まるで国王と見まがう姿をしている。メダルの裏面には王家のシンボルであるライオンや紋章が描かれている。メダルに残る姿はローマの英雄シーザーにも似たいでたちであり、クロムウェルの自尊心が表出したものと言えようか。このようにして見れば、メダルはまさに数百年前の歴史を物語るモニュメントである。第9章においてイーヴリンは人相学の観点からクロムウェルの肖像に凶太さ、残忍性、野望を読み取っている。共和政時代にクロムウェルから目をかけられたことは、サイモンにとって必ずしも幸運なことではなかったかもしれない。

王政復古、すなわち亡命していたチャールズ2世のロンドン帰還後、サイモンは国王に嘆願書を提出した。それは、新たに造幣局の首席彫刻家としての職を任命してほしいことと、1643年に議会の命によって国璽を作成し、王政復古までの間、造幣局および印章の首席彫刻家であったことを赦免してほしいという願いであった。当初、再任されたいという要請は認められなかったが、1661年に首席彫刻家として復職することになった。しかしその頃、国王チャールズ二世は、オランダへの亡命中に支援を受けていたロティア一族から、ジョン・ロティア (John Roettiers, 1631-1703) とその兄弟をロンドンに招き、新しい硬貨の製造を依頼していた。ロティア兄弟も大変高く評価される技術を持った職人であった。1662年1月、サイモンとロティア兄弟は新しい硬貨の鋳型を彫るよう命じられ、それぞれが銀のクラウンの試作品を製作し、腕比べが行われた。結果としてはロティアの作品が採用されることになった。それを受けて、1663年にサイモンはいわゆる "Petition Crown" を制作した。この作品は、サイモンが手彫りした刻銘からその名が付けられたが、今日に至るまで、驚異的な彫刻技術の傑作とみなされている。この作品を書籍の中で紹介したのはイーヴリンが初めてであった。*Numismata* 第7章、239ページには次のような版画 (図1) がある。

具体的に言えば、サイモンは縁 (リム) の部分につきのような国王への請願を2行に刻んだという。"Thomas Simon most humbly prays



図1

your Majesty to compare this his Tryal-Piece with the Dutch; and if more truly Drawn and Emboss'd, more Gracefully order'd, or more accurately Ingraven, to Relieve him."すなわち、トマス・サイモンはこの作品を国王陛下にご覧いただき、ライバルのオランダ人彫刻師のものとこれを比較して、こちらのほうが見事に仕上がっているとご判断を賜りたい、というペティションである。メダルが歴史上の人物の功績を伝えるだけでなく、一芸術家の悲哀さえも物語っているという、特殊な例と言えよう。⁵⁾ イーヴリンはメダル両面の版画を掲載するだけでなく、リムに刻まれた文字を版画の下部と本文中に示している。

イーヴリンに続いては、好古家で版画家のジョージ・ヴァーチャー (George Vertue, 1684-1756) が自身の著作に同じペティションクラウンの版画を取り入れた。ヴァーチャーの著書 *Medals, Seals, Great Seals, from the Works of Thomas Simon* (1753) は、タイトルが物語る通り、サイモンによる作品のみを扱う書物である。その本の中でヴァーチャーは、イーヴリンの例からさらに一步踏み込むようにして、ペティションクラウンの両面だけではなく、リムに刻まれた文

字についても全体が読み取れるような図を挿入している。(図2)

銘文の翻刻に加えて、きわめて繊細な技術によって再現されたリムの部分が版画の中に示されたことによって、サイモンの作品がいかに特殊なものであったかを読者は具体的に知ることが可能となったのである。

2 Numismataの受容と評価

Numismata の出版を手掛けた書籍商が残した献本リストから、出版後すぐに書物を手にした人々の名前が明らかになる。これによってイーヴリンの交友関係はもちろんのこと、同じ興味関心を持つ読者層・ターゲット層の一部を知ることができる。書籍商が記した献本リストは、1697年1月11日付のイーヴリンへの書簡において見ることができる。33名までがナンバリングされている。D. W. Dykesによれば、それに加えて2名、さらに友人のロバート・プロットなど別の人物にも献本があった。⁶⁾ 献本は著者が出版までに恩恵を受けた人物に対して行われることが主である。33冊のうち、約三分の一にはページの端に金で緑が施された「天金加工」があり、これは著



図2

者にとって特に重要な人物に献呈されたことが推測できる。「天金加工」の本を受け取った人物を挙げると、まずは著者がこの書物*Numismata*の献呈文を宛てたFrancis Godolphin (1678-1766)の父、Sidney Godolphin (1645-1712)である。出版当時の1690年代には第一大蔵卿を務めており、政界の重鎮であった。妻のMargaret Godolphin (?-1678)とイーヴリンは、Margaretが独身で宮廷に仕えていた頃から交流があった。若くして亡くなったMargaretの生涯をイーヴリンが綴った伝記は長くマニュスクリプトのまま保管されていたが、19世紀になって出版されることになった。FrancisはSidneyとMargaretの間に生まれた唯一の子である。また、Sidney Godolphinの兄弟Sir William GodolphinとDr. Henry Godolphinに対しても、天金加工の書物が贈呈されている。前者は政治家で男爵、後者は英国国教会の聖職者であり、かつ名門イートン校の校長を務めた。Godolphin家の人々については、イーヴリンのダイアリーにも名前がたびたび記されており、親交があったことがうかがえる。この3名によって示唆されるのは、ロイヤリスト、貴族、宮廷、政界、国教会、というイーヴリンの交友関係であり、かつニュミズマティクスに関心を持つグループあるいは層の存在である。英国国教会のトップに立つカンタベリー大司教Thomas Tenison (1636-1715)にも天金加工の本が献呈されている。イーヴリンはテニソンのことを高く評価し、ダイアリーにも彼との交流についてたびたび言及している。献本リストの冒頭部分ですでに貴族、政界、教会の人脈をうかがい知ることができる。

つづく献本リスト上位すなわち天金加工本の宛先に名を連ねているのは王立協会のメンバーである。Charles Montaguは*Numismata*出版当時王立協会の会長を務めていた貴族で、政治家で詩人でもあった。造幣局長官にIsaac Newtonを推薦したことで知られている。William Charletonは古物収集家としてよく知られ、イーヴリンは数多くの稀有なメダルを含む彼のコレクションを見たことを1686年12月16日のダイアリーに記し

てる。⁷⁾ Dr Richard Bentleyは国王の蔵書管理官であり、*Numismata*の中でも彼に言及し、その能力の高さを称えている。友人のピープスにも天金加工本が贈呈された。その他、貴族の面々が献本リストに名を連ねる。⁸⁾ 並装丁の書籍に関しても、20数件にわたる献本先はほとんどが王立協会のフェローであり、かつ何らかの形でニュミズマティクス研究に携わる面々である。

*Numismata*は1697年に初版が出されたのみで、のちに再版されることはなかったことから、大成功をおさめた作品とは言えないだろう。イーヴリンは1682/1683年の時点でニュミズマタの出版準備を進めていた。このことは、彼がロバート・プロットにあてた書簡で知ることができる。準備中の書名は*A Discourse of Medals. - Of Manuscripts. - Of Stones. - Of Reason in Brute Animals.*であり、当初はニュミズマティクス研究に収まらない、より大きなスケールの書物の制作を考えていたようだ。しかし結局はメダル研究のみを*Numismata*というタイトルを付け、フォリオ判で上梓した。1680年代初めには構想があったとすると、出版までにはかなりの時間を要したことがわかる。そしてイーヴリンは、1697/98年、一般に発売される前の段階で、私的なパーティーにおいてメダル研究の成果となる本を"diverse Gentlemen"に贈ったことをダイアリーに記した。⁹⁾ このときに書物を献呈された人々とどの程度重なる内容であるかは不明だが、上記で概観した通り、書籍商による献本リストには書物を受け取った30名以上の氏名が記録されている。

同時代の評価については実際のところ詳細が不明である。出版後まもなく、王立協会の刊行物である*Philosophical Transactions* (28 February 1698 発行、Volume 20 Issue 237)の中で約5ページにわたってレビューが掲載され、その中で*Numismata*は「精緻な論文」"elaborate treatise"だと言われている。レビューとは言え、その内容は各章の概要であって、あくまでも解説的である。ところが、18世紀後半になると批判的な意見が目立つようになり、それが現在まで*Numismata*に対する評価の定番となってい

る。本題からの度重なる逸脱、文章表現の不明瞭さ、さらには誤った情報の多さのため、体系的な研究書に求められる信頼性が十分でないことは否定できないかもしれない。¹⁰⁾ さらに、Horace Walpole (1717-1797) はイギリスの絵画と画家についての著書の中で*Numismata*に触れ、イーヴリンが彫刻家について十分な興味を示していないことに不満を述べている。たとえばチャールズ I 世のメダルを紹介するときに、メダル制作者のイニシャルと思われる N.R.F. という 3 文字が彫られていることに一切触れておらず、巻末の索引を見ても肝心な情報は一切得られないとしている。イーヴリンの才能、学識を認めながらも、テーマを逸脱した内容すなわち人相学などは封印すべきだったのではないかと述べている。実際のところイーヴリンは*Numismata*の中で人相学に 1 章を費やしているため、この見解は否定できないだろう。¹¹⁾ 現代に至るまでこのような評価が主となり、たとえばロンドンの古銭学協会においてもイーヴリンと彼の*Numimata*に関する評価は厳しい。¹²⁾

とは言え、イーヴリンが意図したことはある意味では達成されたと考えることもできる。つまり、巻頭に書かれていたように、彼は大陸諸国に遅れを取る英国内でのニューミズマティクス研究を前進させたかったがために筆を執り、後の世代によって研究が深化されることを願っていた。*Numismata*を読んだ William Nicolson は、それをきっかけにアングロサクソン以降のノルマン期からスチュアート期までの英国のニューミズマティクス研究を行うことを思い立った。¹³⁾ ペティションクラウンに関して言えば、前述した版画家の George Vertue は、イーヴリンによるサイモンの作品の紹介をふまえて、さらに詳細な版画によってペティションクラウンを紹介した。また、ヴァーチューは*Numismata*においてサイモンの作品を紹介するときのイーヴリンの言葉を長々と引用している。

... he therefore made his famous Trial-Piece ; which Mr Evelyn has described

in these words, — "For the honour of our countrymen, I cannot here omit that ingenious trial of skill which a commendable emulation has produced, in a Medal performed with extraordinary accuracy, by one, who having been deservedly employed in the Mint at the Tower was not willing to be supplanted by foreign competitors." (Vertue, p. 55)

19 世紀のニューミズマティストで大英博物館の古物管理を長年務めたホーキンス (Edward Hawkins, 1780-1867) も、たびたびイーヴリンの著作に言及している。精密な版画と記述を合わせてメダルを紹介した*Numismata*は、大きなインパクトを持つ書物であったことは間違いない。

むすび

17 世紀後半の英国において類まれな博識をもって幅広い分野で活躍したイーヴリンが、ニューミズマティクスすなわち古銭学研究の書物を出版した経緯を考察してきた。イーヴリンに*Numismata*を執筆するに至らせたものは、たとえば庭園や美術、環境問題などと同様に、彼がヨーロッパ大陸で見聞してきたもの、すなわち古銭学研究の発展であった。イーヴリンの目的は、第一にはニューミズマティクスにおいて大陸諸国にひけを取らない研究を進めること、さらには英国独自のメダル研究を推進すること、この 2 点であり、これらは十分ではないかもしれないが、*Numismata*をもって達成されたと言えるだろう。

書物史の観点から*Numismata*の特徴を分析していくと、テキストと挿画の融合が相乗効果を生み、後世に大きな波及効果をもたらされたことを知ることができる。また、献本リストからは、具体的読者層と当時の英国におけるニューミズマティクスの浸透の様子について推測することが可能となる。この作品の評価については、否定的なとらえ方が長年一般的となっているが、その一方では特にペティションクラウンへの言及など、ニューミズ

マティクス研究において有効で有用な部分も確実に存在することを主張したい。ただし、本論考においては、筆者の専門的知識の不足のため、ニューミズマティクスについての考察は限定されており、書物史からのアプローチでこの論考をまとめざるを得ないことをおことわりしておきたい。

17世紀の書物史において、東西に離れた英国と日本とでは、共通する現象が起きていることがたびたび目に付く。ニューミズマティクス研究が本格的に始まり、より多くの人々がそれに関心を持ち、貨幣その他の収集をはじめ、そして早期の日英ニューミズマティストによる書物が出版されたのは偶然にも1690年代のことである。また、古銭収集家の前田正甫が『化蝶類苑』（写本）を著し、幾多の銭貨を記録したのも同じ頃である。執筆、出版の目的は一致するものではないとしても、個人の収集家・研究者による書物の制作がほぼ同時期に重なるというのは興味深い。¹⁴⁾ このことに関しては稿を改めて論じることにしたい。

謝辞

本研究はJSPS科研費19K21631および22K18473の助成を受けたものです。

注

- 1) John Evelyn, *Numismata, Discourse of Medals, Ancient and Modern* (London, 1697) p. 1.
- 2) ニュミズマティクスについて説明を補足するが、これはそもそもコインとメダル両方の研究を指す。ただし、Barbara Baxterはつぎのように言っている。"Evelyn, it will be noticed, called coins "medals"— a word which takes us back in a single stride to the infancy of numismatic study, set in a still darkened Europe on which the Renaissance had yet to dawn." つまり、バクスターによれば、イーヴリンの使用する用語について言うと、"medal"と"coin"の区別は厳密にはなく、イーヴリンは硬貨をも「メダル」と呼んでいて、このことはるか昔にその原点があるというのである。12世紀初頭に、ある硬貨を意味する言葉として使われていたものが、15世紀には、過去の時代に使用された硬貨を指すようになり、さらに時を経て、通貨として使用されることを目的としない硬貨を意味するようになったとBaxterは述べている。Baxter, Barbara A. *Ancient Numismatics* New

York: American Numismatic Society, 1958.を参照。
<http://numismatics.org/digitallibrary/ark:/53695/nnan128713> (accessed 2024/09/25)

- 3) *Numismata* の図版制作者の詳細は不明であるが、一部は John Savage (fl. 1683-1701) によるものとされている。(ODNB参照)
- 4) https://www.britnumsoc.org/publications/Digital%20BNJ/pdfs/1987_BNJ_57_16.pdf
British Numismatic Society, Presidential Address 1987 (by H. E. Pagan) 参照
- 5) このクラウンは現代のテクノロジーを用いても制作が困難であると言われるほどの精密な作品である。サイモンが卓越した技巧を尽くして制作したものであることに加えて、大変希少であるため、現代では驚異的な価格が付けられ取引されている。
- 6) Dykes, D. W. (2018) 'John Evelyn and his *Numismata*', *British Numismatic Journal* 88, pp. 113-138.
- 7) William Charleton は別名 William Courten といい、彼がミドルテンブルに構えていた、古物を揃えた一種の博物館は当時アンティークエリーの間では注目を集めていた。
- 8) Marquess of Normanby [John Sheffield] (1648-1721)、Lord Chancellor [Sir John Somers] FRS PC, (1651-1716)、Lord Privy Seal [Thomas Herbert, earl of Pembroke] FRS (c.1656-1733) と続く。
- 9) ダイアリーは *The Diary of John Evelyn*, edited by Austin Gibson, 3 vols, Routledge, 1906 を使用。
- 10) 18世紀後半における *Numismata* に対する批判的な評価の別の例を、極端なものではあるが、参考までに挙げておく。"None of his observations are new, but all tacitly taken from Vico, Le Pois, Patin, and Jobert. The plates of English medals are of little use, now that those of Snelling have appeared. Even they would have been better understood, had he not added explanations. There is, in the British Museum, a copy of this work, corrected by the author, with an original letter prefixed, complaining that the printer had utterly mangled and spoiled his work, so that it is necessary to give corrections. The corrections are for the worse." Pinkerton, J., *An Essay on Medals*, 2 vols, (London, 1789), I, xi. ジョン・ピンカートンは好古学者である。
- 11) Walpole, *Anecdotes of painting in England : with some account of the principal artists, and incidental notes on other arts* vol.2 (Oxford, 1826), pp. 77-79.
<https://archive.org/details/anecdotespainti02walpgoog> (accessed October 31, 2024)

- 12) 注4に示した原稿の中で、Paganはイーヴリンが専門知識に乏しいと批判している。
- 13) ニコルソンは知人で好古学者のソースビーにあてた1697/8-03-17の書簡で次のように述べている。"Upon perusal of Mr. Evelyn's *Numismata*, I resolved to conclude with a chapter about our English Coins, from the Conquest to the end of Queen Elizabeth. I have several in my own possession which are not taken notice of either in Speed or Camden; and I doubt not but you have abundantly more. Let me request an account of those which you think most remarkable, with their inscriptions, that I may compare them with my own, and see how far I can encourage our English historians (in future times) to hope for a complete collection of them." Hunter, J. (ed.) (1832) *Letters of Eminent Men addressed to Ralph Thoresby, FRS, London.* p. 316.
- 14) 日本のニューズマティクス研究に関しては「江戸時代における古銭書の全貌」
<http://www.kurokawa-institute.or.jp/files/libs/1304/20200601142211722.pdf> (accessed October 31, 2024) および「日本初期貨幣研究史略」
<https://www.imes.boj.or.jp/research/papers/japanese/kk24-1-2.pdf> (accessed October 31, 2024) を参照。